

Civis Magazine PERIPLUS

“学校生活を、政治を知る場に”

中 学や高校で生徒会長を務め、学校という世間と比べたら小さいですが、1つの”社会”の枠組み作りに携わる中で社会を変える実感を得たことが、私が政治に興味を持ったきっかけですね。」

そう語ってくれたのは、現在大学に通う傍ら一般社団法人日本若者協議会で若者の意見を政党に届ける活動をしている古田亮太郎さん(19)。

小学校の頃から学級委員や運営委員、中学校や高校では生徒会長として学校活動に携わってきた古田さんは、学校での経験が政治に興味を持つうえで大きかったという。

「若者協議会を知ったのは高校3年生の大学受験が終わった後に SNS でたまたま投稿を見たのがきっかけでした。もともと学校教育に対して不満があったので、それを政治家に伝える良い機会だと思ったのがひとつです。それとこの若者協議会が超党派で党派に関係なく、若者の声を吸い上げて届けることができることも魅力でした。」と若者協議会に入った理由を語ってくれた。

若者協議会の活動を通して感じた若者と政治の関係については、

「そうですね、こういう団体に所属しているからってということもあると思うんですけど、政治に対して興味のある人と全くない人では、知識や経験的なところでどんどん差が開いていっているな、と感じています。僕が高校生だった時も同級生と政治の話をするのはほとんどなかったですし、そういう話をするとう浮きましたね。ただ、”政治ってこんなんだよ”っていうのを無理してみんなに強要する必要はないかなとは思っています。それよりも僕が小中高で経験したみたいに、学校とか身近なコミュニティに関わって動かすような経験を増やしていくことが、若者と政治の距離を近づけることに繋がると思っています。」と語ってくれた。

自身がこれまでの学校教育に不満があることもあり、現在は”教育”分野に関心があるという。特にこれまでのように5教科7科目だけを淡々と教えるのではなく、もっと将来の仕事や実務に絡めた形で教えることで、生



古田 亮太郎さん(19歳)

2001年生まれ。

慶応義塾大学在学中。

高校生の時に一般社団法人日本若者協議会を知り、現在は同法人の教育政策委員会委員長として活躍。

徒一人一人が大学での学びや将来社会で成し遂げたいことを発見し、目的意識を持って学校で学んだことを自分の中に取り込むことができるようになる、と教育への想いを語ってくれた。

活動を通して感じた今の政治に関しては、

「教育というところに絡めると、若者協議会で活動していると色んな政治家の方とお会いする機会もあるんですが、政治家の方の多くは、もちろん違う方もいらっしゃると思いますけど、いわゆる今までの教育で成功してきて、政治家になったパターンが多いと感じました。だからなのか、社会的弱者の声に耳を傾けるのが難しいのかな、ということを感じました。それが何も悪いと言っているわけでは無くて、僕も含めて実際に社会的弱者の方の置かれている環境を実際に経験したわけでは無いので、その意見を代弁するのも限界があるんだと思います。だからこそそういう環境を経験したことがある方がもっと声をあげやすいようにしていくことが必要だと思いましたね。あと、気づいたことは政治家の間の温度差がかなりあるということですね。若者や社会的弱者の方の意見に耳を傾けようと様々な活動を精力的にやられている方がいらっしゃる反面、全然活動されていない方もいらっしゃるって、その差に驚きましたね。僕はこういう活動をしているので、精力的に活動されている方を見ることができますけど、日常生活ではなかなか見れないし、メディアも不祥事を主に取り上げるので、政治に対するイメージの悪化に繋がっていると感じました。」と語ってくれた。

最後に古田さんにとって”政治とは”を伺った。

「そうですね。僕にとっての政治とは、”社会の枠組みを変える” ことですね。ここでの“社会” というのは、世間一般の社会だけではなくて、学校や学年、クラスといったものも含まれていて、そこに生きる人たちがどれだけ生きやすい社会をつくることができるか、を考え実行していくこと。それが政治だと思います。なので学校生活、例えば生徒会選挙も立派な政治だと思うので、そういうところから政治に興味を持ってもらうことが大切だと思います。」

学 校生活。

現在の日本では中学校は義務教育、また高校への進学率は平成 30 年度に時点で 98.8%となっており、若者にとっては一番身近な生活コミュニティの 1 つであることは確実であり、若者の政治参加促進を考えるうえでは欠かすことのできない存在であると言える。

皆さんも生徒総会や生徒会選挙に参加した経験はあると思う。だが実感の沸くものだったと必ずしもいえるものだっただろうか？何となくで投票したりしていた経験がある方も少なくないのではないだろうか？

事実私自身、中学校や高校の生徒会選挙の”投票”は何となく候補者氏名に丸をつけていた記憶があるし、ましてやそこから”政治”を感じたことはほぼ無かったと言っても過言ではない。というのも私の通っていた学校では生徒会や生徒が主体となって学校の仕組みを動かすということがなく、その行動によって目に見えて変わるものがなかったからだ。

もちろん主体的に生徒が動かしている学校もあるだろうが、そうでないところが多数なのではないだろうか？

だが、政治を身近に感じる手段として学校を使わない手はない。とすれば、もっと生徒一人一人が学校の運営に携わり、”学校を動かしている” という ”実感” と “目に見える結果” が必要になってくるのではないだろうか？

¹ 高等学校教育の現状について令和元年 12 月 9 日 文部科学省初等中等教育局参事官(高等学校担当)